東京学芸大学　令和６年度「若手教員等研究支援費（若手教員等支援枠）」研究成果報告書

研究課題	母子生活支援施設における親子関係構築支援のプロセス	
氏名 岩﨑　美奈子	所属 総合教育科学系　教育心理学講座	職名 講師

APRIN e-ラーニングプログラムの受講　☑←受講済の場合はチェックをすること

【研究成果の概要】　（文字の大きさ９ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

【問題と目的】

母子生活支援施設（以下、施設）は社会的養護関連施設の中で唯一、母子を分離せずに利用できる児童福祉施設である。近年の社会的養育においては、子どもの心身の健康における永続的な養育環境（パーマネンシー）の重要性が強調されており、分離に至る前の親子支援のニーズは益々高まっている。加えて、子育て困難世帯が顕在化する我が国において、親子関係を構築するための支援を欠かすことはできない。こうした社会情勢において、戦後長らく親子関係を含む包括的な家庭支援を実践してきた施設における支援のノウハウは、今後の我が国の家庭支援において有用な示唆を与えると考えられる。そこで本研究では、退所者の施設入所から退所に至るまでの振り返りの語りから、どのような支援やかかわりが利用者と支援者の関係構築に寄与し、利用者にとって有用であったのかを検討することを目的とする。

【方法】

2024 年 7 月から 2025 年 1 月にかけて、施設を利用した経験を持つ退所者 4 人とその担当職員及び施設長を対象として、それぞれに１対１の半構造化面接を実施した。面接は退所者と担当職員及び施設長で各１回実施し、所要時間は２時間弱であった。語りは IC レコーダーに録音し、逐語録としてデータ化した後、退所者の語りはグラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して分析した。職員及び施設長の語りは退所者の方の語りを裏付けたりより詳細に把握するために使用した。なお、本研究は早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施した（承認番号：2024-004）。

【結果】

施設での体験は 4 つのカテゴリーと 16 の概念からなる、「母子の育ちを支援し社会への安心感をはぐくむプロセス」として一つの中核カテゴリーに集約された。ストーリーラインを以下に示す。

施設での体験は、［否定的な被養育体験］や［心身の健康問題］、［子の発達課題］など、家庭内の問題だけではないさまざまな困難が複雑に絡まり合うなかでスタートする。しかし、［施設に対する誤解］のために入所に対して前向きになれず、【傷つきを抱えての入所】となる。当初は、［先行き不安］や、他者への不信感から［共同生活の不安］を募らせるも、［生活の安定］により落ち着きを取り戻すことができるようになる。そのなかで、楽しそうに過ごす［子の柔軟さ］を目の当たりにし、どんなことでも話を聴いて助けてくれる［駆け込める場所］の存在を認識することが、【生活基盤の安定による安心の獲得】につながっていく。そうした環境は、［見守られている感覚］を体験することに寄与し、施設は［頼れる環境］として、［入居者同士のかかわり］や［自己の表現］といった主体的な行動にチャレンジすることを後押しし、【主体的な自己の回復】（or【職員を頼りにしたチャレンジ】）に貢献する。こうした経験のなかで、職員の対応は母のモデルとなっており、［人間関係の学び］や［子育てスキルの習得］の機会を得る。これはまさに［実家機能としての施設］であり、自分を見守ってくれる場所、頼りにできる場所があるという事実は、【社会で生活することの自信】となっていく。

【考察】

結果より、施設利用者は入所期間のあいだに、職員、ひいては施設と安定したアタッチメント関係（親子関係）を築いたプロセスが読み取れる。施設での生活はまさにアタッチメント形成のプロセスといえる。また、本研究が明らかにしたことは、職員が母の養育者となり、施設が実家として機能することで、母が家庭を営むことを支援しているということである。これは生活支援にとどまらず、生活支援のなかで育まれる関係性の支援を含み込んでいる。こうした支援は親子の関係性にも波及し、親子関係構築支援につながっていくようである。このことは、子の立場から考えると、親子分離を防ぎ、子のパーマネンシーを保障することと同義といえよう。

【研究成果発表方法】

- 日本子ども虐待防止学会第 31 回 ほっかいどう大会にて口頭発表（エントリー予定）
- 「母子生活支援施設における親支援の実際：入居者へのインタビュー調査から」子どもの虐待とネグレクト（投稿中）